

奈良県立万葉文化館蔵

菅楯彦「大伴旅人卿羨酒壺」解題

大谷 歩

【書誌情報】

(貴重書番号:イ10)

〔作者〕 菅楯彦(明治十一(一八七八)年〜昭和三八(一九六三)年)

〔制作年代〕 昭和二(一九二七)年以降

〔体裁〕 軸装

〔寸法〕 本紙 縦三八・五cm 横五五・三cm

軸全長 縦一三八・八cm 横七〇・〇cm

〔料紙〕 紙本

〔収録歌〕 『万葉集』卷三・三四三番歌／卷三・三四八番歌

〔その他〕 本紙の朱文方印「菅原楯彦」、白文方印「此楽何極」。

箱書「大伴旅人卿羨酒壺」。蓋裏に「浪速御民楯彦」

の墨書、「楯彦」の白文方印あり。

【解説】

本作品は、『万葉集』卷三に収録される「大宰帥大伴卿の酒を讃むるの歌十三首」(卷三・三三八〜三五〇番歌)をモチーフとして

描かれた画幅である。「酒を讃むるの歌」は大伴旅人の代表作の一つで、古代中国の文人たちの飲酒にまつわる作品を踏まえて詠まれたと考えられている。本作品にはこのうち二首が讚に記されており、翻刻①歌は「なかなか人にあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ」(三四三番歌)、②は「この世にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にもわれはなりなむ」(三四八番歌)である。②歌の四句目は、『万葉集』の諸本や主要な注釈書は「虫に鳥にも(蟲尔鳥尔毛)」であり、本作品のように「鳥に虫にも」とするのは異例である。

作者の菅楯彦氏は、明治から昭和にかけて活動した日本画家である。若い頃より有職故実などを学び、和漢の古典・故事を題材とした作品を好んで描いた。明治三五(一九〇二)年、国学及び有職故実の師・鎌垣春岡が『万葉集』にちなんで考案した「楯彦」に改名した<sup>②</sup>。本作品の朱文方印は一九二七年以降、箱の蓋裏の朱印は一九二三年以降から使用された印であることから、本作は昭和二(一九二七)年以降の作と考えられる。

註

① 歌の引用は中西進『万葉集 全訳注原文付』(講談社文庫)による。

② 前田明範「菅 楯彦の生涯と画業」(倉吉博物館編『第2回菅 楯彦 大賞展』図録、一九九三年)。

参考『日本美術年鑑』昭和三十九年版(東京国立文化財研究所美術部編、一三五〜一三六頁一九六五年)、『菅楯彦没後十五年展 浪速の粹 雅人のこころ』図録(鳥取県立博物館編 二〇一四年)。



菅楯彦「大伴旅人卿羨酒壺」奈良県立万葉文化館所蔵



（箱の蓋裏の署名と朱印）

【讀・翻刻】 ※「/」は改行箇所

- ① 来む世にハ／鳥に蟲にもわれ／はなりな／む  
なかく／人にと／あらすは酒壺に／なりにて  
しかも／酒にしみなむ
- ② この世にしたぬしくハあらハ  
大宰帥大伴旅人卿讚酒歌

〔付記〕 本解題を記すにあたり、安永幸史氏（奈良県立万葉文化館主任学芸員）より菅楯彦に関してご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。